

草戸千軒I展示室では、今からおよそ650年前の南北朝時代を中心とする時期の、草戸千軒の町並みを実物大で復元するとともに、実際の出土資料を生活の場面ごとに分類して展示し、人々の生

活の様子を詳しく紹介しています。

前回に続いて、「ものづくり」にかかわった職人の世界を展示資料から紹介します。今回は「作る(かわらけづくり)」のコーナーです。

草戸千軒町遺跡からは、土器・陶磁器・石製品・木製品・金属製品など多様な材質の生活用具が出土していますが、大多数を占めているのは土器・陶磁器といった焼き物です。焼き物が多く出土するのは、当時の人々が大量の焼き物を消費していたことはもちろんですが、それ以上に、木製品や金属製品のように地中で朽ちたり錆びたりすることがないため、多くの製品が現在まで残ったことを理由に挙げることができます。

さまざまな種類の焼き物の中でも、特に多く出土しているのがはじしつどき土師質土器と呼ぶ素焼きの土器で、一つのゴミ捨て穴から1トンにもおよぶ量の土師質土器が出土したこともあります(写真1)。このように大量に出土する土師質土器は、日常的な食事に使われたのではなく、宴会やまじないなど、儀礼的な場面で使われたものが、再利用されることなく一括して廃棄されたものと考えられます。

土師質土器の大部分は、椀・皿などの食器類です(写真2)。これらの土器に類似する製品は、岡山県から広島県東部にかけての瀬戸内海沿岸部を中心に分布していることから、吉備型の土師質土器と呼んでいます。草戸千軒の町で消費された土器も、吉備地域の沿岸部のどこかで生産されたものと考えられますが、具体的な産地は明らかにできていません。低い温度で焼く土師質土器は、大規模な窯を構築する必要がないことから、工人集団が各地の消費集落を移動しながら生産した可能性も指摘されていますが、草戸千軒町遺跡からは明確に土器を焼いたと判断できる遺構は検出できていません。どのような人々によって土師質土器が作られていたのかを解明することは、今後に残された課題です。

土師質土器の種類や形態・寸法などは時代とともに変化しており、同時に出土した遺物や遺構の年代を決定する際の「ものさし」としても利用されています。現在では、草戸千軒町遺跡から出土した土師質土器は、20～30年前後の幅で年代を確定することができるようになっています。



(写真1) 土師質土器の出土状況



(写真2) 大量に出土した土師質土器の椀・皿



(写真3) 椀と大小の皿がセットになる鎌倉時代の土師質土器



(写真4) 大きさの異なる皿がセットになる室町時代の土師質土器

(主任学芸員 鈴木康之)